

タブレット端末を活用したパンフレット制作の実践

－「表現」「内容」「構成」に着目した和歌山城の魅力を伝えるパンフレット制作－

中岡正年（和歌山大学教育学部附属小学校）

概要：主教材の「ようこそ、私たちの町へ」（光村図書）を主教材とし、和歌山城の魅力を伝えるために、パンフレットを制作する単元を設定した。その際に子どもたちに、「表現」「内容」「構成」に着目するように伝え、活動を行うことにした。実践後のアンケート結果から「撮る・編集する・提示する」が可能なタブレット端末をパンフレット制作に活用することに多くの子どもたちが肯定的に捉えていることがわかった。

キーワード：国語科、和歌山城、タブレット端末、パンフレット制作

1 単元設定について

本実践を行う前に6年生の28人の子どもたちに国語科に関するアンケートを行った結果、次のことがわかった。

「文章を書くことが好きですか」の質問に対して、「好き」「どちらともいえない」「きらい」の中で「きらい」と回答した子どもの数は7人とクラスの4分の一を占めた。次に「国語科は好きですか」の質問に対して「好き」と回答した人数が15人であったことから、国語科はきらいではないが、文章を書くことを苦手としている子どもが多いことがわかった。

そこで、苦手意識を上回る、活動意欲があれば書く活動も積極的になるのではないかと考え、自分たちの学校のすぐ近くにありながらも、まだ知らない多くの情報に溢れている和歌山城について取材し魅力を同世代に伝えるパンフレット作りを行う単元を設定した。

既存の和歌山城のパンフレットは大人向けであり、文章も難しく、小学生には情報量が多いように思われる。そこで、12歳の彼らにとって魅力を感じることを、同世代に伝えることを意識し、パンフレットを制作することで、自分たちの知識や思いが素直に表現された、同世代にとって共感できる作品になるのではと考えた。また、パンフレット制作にあたり、4人グループになり、1人が2ページを担当することにした。このようにページ数に制限を設けたのは、伝えたい情報の取捨選択、精選をすることを期待したためである。さらに、パンフレットは他者が見て評価するので、制作には友だちからの助言が重要になる。助言する側と助言を受ける側の意図や思いに相違があるのは当然だが、何について伝えているのかの観点を共有することは必要である。そこで、主教材や既存のパンフレットの分析には「表現」「内容」「構成」の観点を設け、自分たちのパンフレット制作にも同じ観点をもって行うようにした。そうすることで、お互いに思いが寄り添い助言を行うことになり、自分たちが感じた和歌山城の魅力をより良く表現することになると考えた。

2 タブレット端末の活用意図

パンフレットの制作において下書きを何度も行い清書をすることや間違えた時に、今までの作業の全てをやり直さなければならぬと子どもたちが感じた時、意欲的に活動を継続することを困難にするのではないかと感じていた。そこでパンフレットの制作過程が子どもの思考に沿って変更が容易で何度も可能であれば、その問題は解決できるのでないかと考えた。

そのために、本単元では、パンフレットの制作に際してタブレット端末を活用することにした。タブレット端末を活用することにより、「撮る・編集する・提示する」ことを一台で行うことができる。今までのように紙面のみにて制作する際にはできなかった写真や文章の配置が容易に行うことができるので、上記の問題点の解決になり、自分が伝えたい思いを書いた文章そのものについて何度も思考を繰り返すことになるのではないかと考えた。

3 実践概要

(1) 実践環境と対象児童

4名が1グループになり、主に普段、授業を行っている教室において活動を行う。その際、1グループにつき1台のタブレット端末（iPad）とアプリケーションの「Keynote」を活用した。

対象児童は第6学年の児童（28名）であり、前学年時に本実践で活用した物と同じタブレット端末を活用した児童もいる。

(2) 授業内容とタブレット端末活用場面

授業は大きく以下の流れで行い、②と③において主にタブレット端末を活用した。

- ① 主教材を読み、既存のパンフレットの分析を行う
- ② 取材を行う ※図1
- ③ パンフレット制作を行う ※図1
- ④ 制作したパンフレットの相互評価を行う
全ての活動を、タブレット端末のみで行うのではな

く、個人が取材したことや、手書きの文章はファイルにまとめ、必要に応じてパンフレットに活用した。



図1 「取材」と「パンフレット制作」の場面

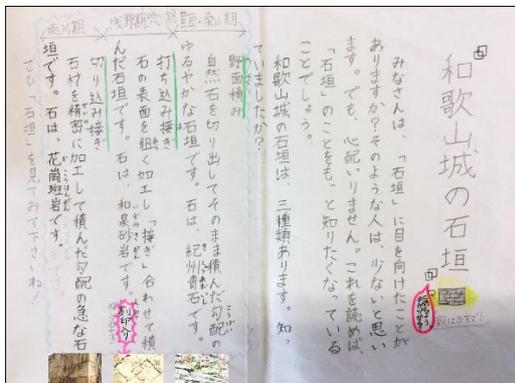


図2 子どもたちが制作したパンフレット一例

4 実践結果

実践後のアンケート結果から、多くの子どもたちがタブレット端末を活用したことについて肯定的に捉えていることがわかった。

まず、『ようこそ、私たちの町へ』の学習でタブレット端末は役に立ちましたか』に対するアンケート回答結果は、「全く役立たなかった」0%「ほとんど役立たなかった」0%「あまり役立たなかった」0%「どちらでもない」0%「少し役立った」8%「役立った」36%「非常に役立った」56%であった。(図3)

次に、「タブレット端末を使うことで『ようこそ、私たちの町へ』をしっかりと取り組むことができましたか』に対するアンケート回答結果は「全く取り組めなかった」0%「ほとんど取り組めなかった」0%「取り組めなかった」0%「どちらともいえない」8%「少し取り組めた」4%「取り組めた」36%「しっかりと取り組めた」52%であった。(図4)

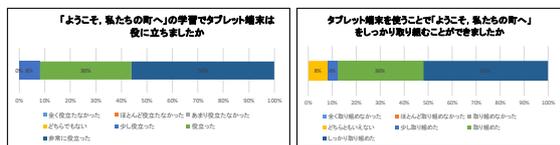


図3

図4

2つのアンケート回答結果から、多くの子どもたちは、タブレット端末活用が自分達の学習活動に役立ち、学習に対して意欲的に行うことができたと感じていることがわかった。

『ようこそ、私たちの町へ』の学習でタブレット端末は役に立ちましたか』の質問に対して、程度の差はあるが全員が「役に立った」と回答している。理由と

して、自分が撮った写真をすぐに活用できたことや、写真や文章の配置を操作しながら考えることができたことなど、タブレット端末ならではの機能を活用し、パンフレット作りの「表現」や「構成」について活動が行いやすかったことを挙げている。このようなタブレット端末の機能に触れた回答は全体の約68%を占めていた。また「タブレット端末を使うことで『ようこそ、私たちの町へ』をしっかりと取り組むことができましたか』に対して「しっかりと取り組めた」と回答した理由としてある子どもは、『「ここも少し直そう』など、イメージを見て考え直せたので、楽しさが湧いてきました。』と記述していた。

これらの結果から、本実践においてはタブレット端末が、その時々活動を支える教具として機能し、子どもたちの学習活動への意欲の向上に一定の効果があったと感じている結果が得られた。

5 実践の振り返りと今後の展望

アンケート結果や授業に対する感想文などからも、本実践のタブレット端末の活用に対しては、子どもたちが肯定的にとらえていることや学習を意欲的に行うことに一定の効果があったと考えられる。

一方で実践の参観者から、「子どもたちがタブレット端末の操作そのものに強い関心を持ち、文章の推敲を行っていないのではないかと」という指摘があった。確かに、子どもの意見の中で、タブレット端末を活用せずとも行えたかもしれないと感じている意見もあり、タブレット端末の操作に熱心になるあまり注意が散漫になってしまった子どもの姿もあった。

このことは、授業者の単現設定の甘さが最大の理由であるが、タブレット端末が子どもにとって目新しいものであり、機器や操作に興味があったことが大きいのではと感じている。何度か活用を行うことで、教具としての慣れや認識をもち、学習そのものに集中していくのではないかと考えている。アンケートの中にも「タブレット端末を使うことで、やる気がでた。」との記述があったり、何度も文章を書いていたりする姿も見られたので、タブレット端末の活用場面と意図を明確にすることで教科の目標達成により近づけるのではないかと考えている。

よって、今後の展望として、学びを支える教具としてのタブレット端末の有効的な活用場面や効果について他教科も含めて実践、検証を継続して行いたいと考えている。

参考文献

「タブレット端末の携帯性をいかした「郷土教育」の具体的展開」 第41回全日本教育工学協議会全国大会 富山大会 pp.236-239 西口雄一郎(山江村立山田小学校)・山本朋弘(熊本県教育庁)